

百魔

1	同郷の偉人頭山満氏との初対面……	29
2	平岡浩太郎氏と初対面の悲喜劇……	32
3	庵主が大活躍の序幕……	36
4	大隈外相爆弾事件の嫌疑で……	40
5	庵主が受けた国事犯裁判……	44
6	品川弥二郎子の勤王主義……	48
7	庵主一代の大失策……	54
8	日清媾和談判に対する警告……	58
9	政党撲滅策を伊藤公に……	63
10	劉宜和尚、親友の妾宅を襲う……	67
11	外資案計画を時の政府に……	73
12	槿花一朝の夢……	80
13	京釜鉄道引受の魂胆……	84
14	劉宜・奥村両雄、晴れの御前試合……	90
15	從容死を待つ一代の傑僧……	96
16	異郷の天地に星一氏と遇う……	102

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	
絶世の美貌が禍して……	男勝りのお菊姫 <small>ぱ</small> ……	あ、稀世の英才後藤小伯……	某維新元勲の遺骨を拾う	児玉総督に大人物を推薦す	妾付借金三十六万円付の居候	一躍銅山成金となる……	猛太郎氏、土方宮相を怒らす	勘当された後藤小伯猛太郎氏	政界の巨人後藤象二郎伯	新聞壳子より製薬王となる……	伊藤侯の知遇を得て……	和魂米才主義の人……	人間の最高目的を達成して……	星氏一生涯の光榮……	至誠、天地を動かす……	希望に輝く青年の意氣……		
209	203	196	190	185	178	173	165	158	153	146	141	135	131	124	118	112	107	

324	318	312	306	300	293	287	280	273	267	262	255	249	242	235	228	221	215
織弱き腕に強盜を生捕る	血の雨降らす漁場争い	天下無双の女丈夫	奇才縦横の俳人錢六	鯛の眼球吸物の縁起	遺産争い解決の妙案	化物屋敷発掘	贋山伏退治	魔人龍造寺隆邦	家運挽回に志す勇少年	十一歳の少年大山師	稀代の兎賊を手捕にす	奇計を案じて恋病を癒す	男子志を決して立てば	突如來訪せる怪紳士	祖国の危機を憂えて	厄介な国事道楽者	支那は永久亡びぬ國

53	庵主が懷抱せる支那政策案
54	一世の巨豪、癌腫に斃る
55	夜陰に響く鉄鎌の音
56	榎本武揚を救つた大西郷
57	フランネルとモンバの争い
58	一攫千金の有利事業
59	万死に一生を得たる幸運児
60	庵主の口添えが一拳六十万円
61	寡言黙行の志士
62	北陸の傑士広瀬千磨
63	大阪毎日新聞の成立
64	大義名分を以て後藤伯に説く
65	胸底深く置んだ一大秘事
66	星亨氏の乾 ^{こぶん} 分を威嚇す
67	終焉に侍る巨頭の面々

百 魔

其日庵 杉山茂丸著

凡例

一、本書は、杉山茂丸著『百魔』（一九二六）大正十五年五月十二日刊行第三版本「初版刊行同年五月十日」、大日本雄弁会刊行）を底本とし、その全文を収めたものである。本文の版は二〇〇六年書肆心水刊行『百魔 正統完本』のものを使用した。

一、底本は旧漢字・旧仮名遣いであるが、これは原則として新漢字・新仮名遣いに置き換え、拗音促音小文字表記を採用した。漢字と仮名の置き換えはしていない。

一、踊り字（くりかえし記号）の使用法、傍点の形状、送り仮名、仮名遣い、音便は、その表記揺れも含め底本のとおりに表記した（新仮名遣いへの置き換えに伴う踊り字の使用は原則として避けた）。〈〉は行を跨ぐ場合にも使用した。

一、句点は底本のままを基本方針としたが、読点は若干加減した。

一、底本の鍵括弧遣いとその包含関係は『「』』であるが、これは「『』」に置き換えた。本書における『』は底本における（）であり、また「『』」内の括弧としても『』を使用した。なお、底本における括弧遣いの対応関係と包含関係の乱れ等をいくぶん補訂した。

一、段落単位の字下げ表記は底本を踏襲したものである。なお、底本における段落単位の字下げ組みの意義を一行空けを以て代替したところがある（段落単位の字下げ組みが数ページにわたる場合など）。その他、適宜の一行空けを補つたところが若干ある。

一、「ママ」のルビ注記（原文のままの意）の用法は通例による。

一、底本の本文はいわゆる総ルビであるが（漢数字にはルビの省略が多い）、本書ではこれを選択的に採用した（漢数字にルビを加えたところがある）。底本ルビのうち外来語が平仮名で表記されているものは片仮名に置き換え、外来語のルビについては、アジャ／アジア等の表記揺れを統一したものがある。

一、本文行内の（）括り二行割注と（）括りのルビは本書刊行所によるものである。

一、一行組の短歌の上の句と下の句の間の空白は本書刊行所が施したものである。

自序

天高地闊の間、四時長々に循環して、花鳥風月の偉觀を呈す。已に奇と云うべし。而して天、未だ其の奇に飽かず、更に人なるものを生んで益々其の奇巧を弄す。蓋し其の性情と境遇とによりて活動の妙機を變顯する。奇中の奇、又之れに過ぎたるものなし。一夜窗外風歇み雨静なるの時、瞑目沈思、半世の遭逢交遊の間に於て、其の奇志奇行あるの人を覧むるに、躍如として一篇の小説を読むが如し。又、其の事蹟の、恰も支那水滸伝に酷似したるものあるは、愈々其の奇を加うるに足るべし。水滸伝は支那元代、武林の人、施耐庵、羅漢中等の筆に成ると伝うるも、全く構想寓意によりて趣向を雄大にし、文章を宏潤にしたるものにして、其の著述根拠の如きも、只僅かに宋の張叔夜が、賊徒を招撫したる檄文によりて、百八人起伏の状を叙述したるにあるのみ。而して此の小説が、東洋各国の人心を鼓舞し、其の境遇の機会に触れて、幾多の奇人を現出し、熾んに歴史の光彩を發揮したるの蹤あるは、正に彼の虛構の小説に挑発せられて、之れを実際に演現したるには非ざるかを疑うなり。今庵主が記述せんとする百魔なるものは、其の趣向の幽妙、文章の靈澈、固より施耐庵等の朦影だも望む能わざと雖、其の事蹟は、悉く庵主が之れを見聞したる、記憶の領域に蒐輯し、之れに庵主筆つ

硯けんの枯粧こじょうを加えて一の小説的となし、以て童蒙哺乳のぐに供う。読者或は時に野花一蝶の戯るゝの思いあらん乎。而して掲ぐる所の人物は、多く今尚存在活動の人々に属するを以て、粗漫そまんの行文、敢て毀譽褒貶しようの衝に置くに忍びず。故に或は人名地名等を変称して之れを記述せる所もあり。読者幸に諒焉せよ。

大正丙寅四月花朝

其日庵主人識

1 同郷の偉人頭山満氏との初対面

壮傑俊傑に会うて神機を覺り
俊傑士道を説いて盟交を契る

庵主が佐々克堂（佐々友房）氏等と誓約をして、政権を私して国威の宣揚を沮害する、藩閥の頭を叩かんと覚悟して、故郷を立出で、馬関海峡に陽関曲を高唱して、生還を期せず、急箭の如く東京に乗り込み、阿修羅王の荒れるが如く荒れ廻つたので、忽ち時の政府の嚴忌に触れ、鼎鑊（煮殺しの刑具）斧鉄前後に迫りて、広き大江戸の中に五尺の体の置処もないようになつたのは、明治十七八年の頃、即ち故三島日本銀行總裁の嚴父三島警視総監の宰領であつた。幾多の同志は牢獄に繫がれ、刎頸の親友は道途に憤死し、常に志を通ずるの知人も四方に紛散して、運善く庵主は、同情ある義客俠婦等の為めに縲縛（獄に入る）桎梏の難を免れ、僅に新聞売をして人目を忍んで居たのである。此時庵主の為めには彼の水滸伝の柴大官人とも云うべき熊本の八重野範三郎と云う長者が、深く庵主の境遇を憫み、佐々克堂氏等と共に庵主を同郷の偉人頭山満なる人に紹介せんと勧めた。當時庵主は郷里を見限る事、他郷の如く、郷人を侮蔑する事、異人種の如き時故、素より頭山氏の姓名などを記憶する筈もなく、唯だ単身独歩自分の考えたる事だけを実行して、安んじて死に就くの覚悟であつたため、深く八重野氏の厚意を謝すると同時に、堅く同郷人に面会する事を拒絶した。然るに八重野氏は既に庵主の性情と、胸中の秘事を観破して居たものか、又は此儘にして可惜若者を道路に斃死せしむる事を余程の毒に思つたものか、其勧誘の決心は牢として抜く可からざるものがあつた。庵主も今は辞するに詞なく、え、儘よ、一度頭山氏とかに遭いさえすれば、此温厚の長者に対する義理も立ち、又夫程豪いと云う頭山氏の人物も分るからと、夫兎も角も一度面会の事を承諾した。當時庵主は銀座三丁目裏町の木賃宿に土佐出身の書生一人と同宿して居たから、夫

と寝物語りに「明日は八重野氏の余儀なき紹介にて、福岡の豪傑頭山満と云う人に面会するのだ」と云うたら、其書生そのが大変正直な物事に気の付く男で、「そんな人に貴方あなた面会して、我々の秘密を観破されでは駄目ですよ、又今持て囃はやす高姓大名の族やからと云うものは、大抵腹抜けの外踏張り斗そそであるから、しつかり褲ふんどしをばりて掛らねばいけませんぜ」と云うから、庵主は「何、心配するな、一匹の人間が一匹の人間に遭うて、負けて帰つて来て堪たまるものか、又、人に云われた位で斯く迄犠牲ほろを払うた殺人魂こんが止められるものか」と云うた。其翌日十一時頃出掛ける時、其書生が、「貴方あなた新聞新聞売なら頬冠ほおかぶりでも良いが、天下を以て任ずるの國士こくしが、同郷の豪傑に面会するのに、帽子も冠かぶらずに往くは恥じやから、僕わたくしが昨晩夜店で七銭で買こうて来た、此帽子を冠かぶつてお出いで」と云うから、礼を云つて冠かぶつて行つたが、今考これえると此これがが絹ハットの古物こぶつである。當時庵主等の仲間は、大抵尻切れの印半纏位しるしばんぢんを着て働いて居たたが、庵主丈けはどう云う工面こうめんであつたか、発明初売の紀州フランネルの荒い立縞ひどくともの單ひとえであった。夫かれが大兵肥満だいひょうで、其恰好は宛まんて褲ふんどし担かつぎが宮中へ參内さんだいする様ようである。頭山氏の宿は芝口しばぐち一丁目の田中屋と云うので、店先で案内を頼むと「二階へ」と云うから登つて行つて、其部屋を見て先ず第一に驚いた。部屋の入口に「御宿おんしゆ 料りょう十八銭前金ぜんきん」と書いた紙が張つてある。破れ襖はしまを開けると、中が六畳で柱も鴨居も菱形ひしやうに曲つて居る。壁落ち障子はいかれが破れた真中に、縁の欠けた火鉢ひばつが一つ赤ゲットあかの上に乗つて居る。其向むかうに久留米紺の羽織を着た五分刈の三十四さんじよ五のシヨボ鬚ひげの生えた男が一人坐つて居る。「サア是これは」との声に応じて中に入れる。庵主は常から冠かぶり付けぬ帽子故、之を取る事を忘れ、其上大男で高い絹ハットを冠かぶつた儘ままで故、ごつんと鴨居にぶつかり、ぺこんと潰れて落ちた。其儘まま中に入りて、火鉢ひばつの向むかうに座を占め、丁寧に初対面の挨拶あいさつをしたら、向むかうも中々丁寧なかよくであつたが、其眼光の炯けい々として人を射る凄ひどまじさは、寧ろ安宿の破れ座敷も眩まばゆき計りの異彩いせである。間もなく隣室より出て来た人々は、的野半介まとのはんすけ、成元義なるしまつねき、來島恒喜きみじょうこうじ、木本常三郎ときよざぶろうなど云う、皆豹眼虎頭ひょうがんとうの壯士ぼうし斗たたかりであつた。皆夫々の挨拶あいさつをして間も無く出ていつた迹あとに、兩人差向むかいで居ると、頭山氏は左脇の床板ゆかいたの破れに口を付けて「おい／＼茶ちゃを持って来い」と叫んだ。ふいと見ると、其床の間の板は一尺余りも破れて、帳場の有様ごうりょうがちゃんと見えて居る、是これでも其宿の破れ加減こわが分る。暫しばらくす

ると頭山氏は徐ろに口を開き、「貴下は官員でも仕て居られた事が有りますか」と云わるゝから、庵主は「いや、まだ一度も官員に成った事はございませぬ」と云うと、頭山氏は手を伸ばして傍に転つて居る絹ハットのへこんだのを取上げて、「此は官員の冠る帽子じやありませんか」と云うた。庵主は夫も知らぬから「イエ、夫は木村屋の麵麺屋が冠る物と同じです」と云い、之を動機として色々と咄もした。其頃までは、庵主も今程のお饒舌でも無かつたが、沈重寡言の頭山氏には、勘なからず感に打たれたのである。夫からぼつ／＼と双方話して、遂に日の暮るゝも忘れ、「貴下牛肉で飯を食うてはどうです」と云われた時は、もう外も真暗であつた。間もなくランプを灯し、飯も仕舞い又深更まで咄す中、頭山氏は斯く云うた、「才は沈才たるべし、勇は沈勇たるべし、孝は至孝たるべし、忠は至忠たるべし、何事も氣を負うて憤りを発し、出た処勝負に無念晴しをするは、其事が仮令忠孝の善事であつても、不善事に勝る悪結果となるものである。此故に平生無私の観念に心気を鍛錬し、事に当たりては沈断不退の行いをなすを要とす、貴下方のお考へはどうか知りませぬが、御互に血気に逸つて事を過まらぬ丈けは注意したいと思ひます。古歌に、

斯までにゆかしく咲きし山桜

おしや盛ぞちらす春雨

と云う事もありますが、僕は有為の知人朋友の為めに、常に心で此感じを持つて忘る、事が出来ませぬ」と話された。庵主は此話を聞了るまでは恍惚として夢の如く、思いに思つた多年の行為に一々鉄針を刺さるゝが如く、嗚呼六親眷族を飢寒凍餒の艱苦に投じて顧みず、只だ世に對する己れ一個の憤にのみ一身を没して、結果の如何を慮らざりしが、人間の誤りと云う物はこんな物か知らん、今日まで悔ゆると云う事を知らざりしは、誤りと云う物を弁えざりし結果である。天下に親しむ人もなく、世に畏るべき友もなし、今斗らずも同郷の偉人頭山氏に会うたは、幸か不幸かまだ分らぬが、何だか変な氣持がすると、今まで張り通したる心の弓弦は、矢も放たずに何だか切れたようと思うた。是が庵主が大正の聖世丁巳の今年まで殘命を持続した一身の維新革命二番目狂言の序幕を切落した初まりである。當時頭山氏は心あつて云うたが、又何と感じて庵主とそんな咄をしたか分らぬが、庵主には何だか一種天使の声と聞えたのである。夫から別に咄もせずに宿に帰つたのは、夜の十時過すぎであつたが、寝に就いても、どたん／＼ばたんと寝返り斗りをして、

過ぎ越方を思^{こしかた}い遣り、天性の強情に理窟の付く丈けは、自分の方に理窟を付けて考^{たが}えて見たが、結論は全く自分の考えが誤つて居た事に帰着した。あゝ残念と吐息する途端に、窓下で鍋焼餚^{うどん}が大声を張上げた。消え行く春の夜嵐に連れて三縁山の鐘の音を聞く頃、はツと寝床の上に起直^{おきなお}つた、「大変だ、俺にはまだ大きな事を考^{ねばならぬ}ね責任が有つた、又た考^える丈けの脳髄^{のうずい}をも持つて居た、夫を仕遂^{さしえ}げるにはこうだ、俺は今まで自分丈けの事を考^{えて}、正に誤まつたから、今日からは断然自分以外の事を基^{もじ}として、人と世との為めに極力働くのだ、好し分つた、極^きまつた」とこう叫んだに違^たない。是から庵主が頭山氏と寝るには床を連ね、食うには卓を共にし、行藏一日も苦楽を離れざりし事、丁度十年である。日清戦争の少し前より庵主は独りで東京に上りて戦争道楽の群に入り、川上參謀次長や、陸奥外務大臣等の間を縫うて、帝国の处分發展に心を傾け、緩急策謀の青藍^{せいらん}に身を染めたのである。あゝ思えば長き夢の世や、三十余年の春秋は、霞^{かすみ}と霧に打かすむ、月雪花^{つきゆきはな}と眺め越す、幾艱難^{いくかんなん}も九十九目織る、世の起き伏しに伴いて、頭山翁も今は早や、頭に宿る霜の影、庵主も負けず父母^{ち、は}が、撫にき筐^{かたみ}の黒髪は、痕形^{あとかた}もなく禿山に、雉子^{きづ}も啼かぬ憐^{あわ}せよ、思い出して笑わじと、思えど笑う可^お笑しさは、知る人のみに限るのである。兎に角庵主は斯^かる魔人の頭目に面会して、又不可思議の新天地を開き、又思いも寄らぬ幾多の新魔人に遭遇するの顛末は、此より追々筆を馳するであろう。

2 平岡浩太郎氏と初対面の悲喜劇

壯士旧恩を追うて墓頭に泣き
怪傑貧窮に処して異名を得る

庵主が頭山氏に面会して、四五日位の後、心臓の鼓動も止まる程の驚報を聞いた。夫は庵主が云うに云われぬ厚恩を蒙^{くわ}つた、旧藩主黒田長溥老公^{ながひろこうきょう}薨去^{こうきょ}の報である。庵主は七歳の時から暫く此老公の君側^{くんそく}に仕候し、初名秀雄^{ひでお}と云いしを、

改めて今しげまわの茂丸と云う名を賜しげまわつたのである。去る明治十三年初めて上京みぎり、生涯忘るゝことの出来ない老公の御訓誨と、今筆に書くことの出来ない深大の恩恵とに悉く違背して、飽迄あさまでの我儘わがまゝと暴戾ばうりとを続行して、終に溜池のお屋敷の門前をも通れぬ程の、自分咎めの大罪を犯したのである。何時かは此罪をお詫せんと思いつゝて、心苦敷ころふらしく暮して居る中に、此悲報である。庵主は数日前同郷畏敬の先輩、頭山氏の意見によつて、多年強情の骨をへし折られ、其後一週間も立たぬうちに、又此落胆の悲報に、云い得られぬ精神上の打撃を受けたのである。此庵主の心理状態を知る者は、第三者として一人もない故、庵主は苦痛煩惱の余り、初めて此心中の顛末を巨細に自白した長文の手紙を、郷里の草の屋に淋しく暮して居る老父に送り、多年剛情の託言おぼごとを云うたのである。是が庵主臍の縚を切つて初めての託言である。庵主の父は、庵主を生んで庵主を育て、庵主にてこ擣りて、常に庵主で泣なき続けて来た人故、今此自觉改心の手紙を見た時の悦びは、不日に来た返書にも躍如として居て、今尚お記憶に新なるのである。扱之は後の事で、庵主は先ず頭山氏及郷里の人々と共に、此感慨深き黒田老公の葬儀に列すべく待構えたのであつたが、何様なんじやう一ヶ月四円の下宿屋に住み、新聞壳を渡世として居る身の上で、突然旧藩主の葬儀に赴くのであるから、其困難は名状すべからずである。先ず理髪店に行つて髪や髪を刈り、宿の主人に事情を咄はなして、着物と羽織袴はかまを借り、八錢の山桐の下駄を買つて出掛けたが、其宿の主人は、人並外れた小男であるから、羽織着物は庵主の腕の半位の袖で、袴は脚の半分位よりないのである。時間際の事故仕方なしに其儘出掛けたが、余程不思議の恰好であつたろうと思う。一方頭山氏の宿に行くと、氏も生れて初めて、非常に高価な洋服を揃えて、今日を晴れと初めて着るのであるが、着方が分らぬ。先白シヤツを着て、夫から直にチヨツキを着、夫からズボンを着、其次にフロックの上着をつけたが、後に一つ不思議な物が残つて居る、夫は桃形のネクタイである。夫を一人で相談をして、「何でも此は頸飾くびかざりに違ひない」と云うて、一番後で頸にピンでブラ下げた。最後にラッコの毛皮付の外套がいとこうを着たが、サア大変、帽子が無い。そうして又それを買う金が一文もんもないのである。「帽子位は無いでも構わぬ」と云うて、頭山氏は市街まちじゆう中のそく潤歩ねむりするのである。とう／＼葬儀しゆぎを仕舞しまい、青山の墓地に行つて、思い出多き旧主老公の御遺骸は、地下幾丈の底に永久の眠に就かれたのである。会葬者は広き墓地に充满

する程あつたが、其中尤も敬虔の意と、悽鬱の感に閉じられた者は身幅の足らぬ借着の庵主と、不揃の洋服姿の頭山氏計りでは無かつたかと思われた。埋葬式が済んで人は蜘蛛の子の如く八方に散つたが、其混雜の中に頭山氏の紹介で、庵主に挨拶を云うた人が、雷名天下に轟いた同郷の先輩平岡浩太郎氏であつた。抑此平岡氏の嚴父仁右衛門氏と母の里方なる林作左衛門家とは、浩太郎氏の幼少の時より殆んど同家庭内に暮した程の親敷関係があつたそうなが、庵主は七歳の頃より無類の悪戯小僧で、諸所に流落して居た為めに、浩太郎氏とは面識をさえ有せぬのであつた。浩太郎氏は天資の英邁に加うるに、夙に深遠の大志を抱き、常に国事を慷慨して各地方の騒乱事件には一として関係せざる事なく、弘く天下の志士と結んで国事を謀議せるより、一種微妙の交際術に長じて、初対面の人等には、一見其人の心を執る程の気魄を漂わす人である。頭山氏が青山原頭で庵主を介し、「此人は同郷の傑士杉山と云える人なり」と、破格の紹介をするや、平岡氏は慇懃の辞令に、温厚の態度を以て庵主に荐りに交歎を促がした。直に自から奔走して三台の人力車を群集の中より呼び来り、庵主と頭山氏とに「さあ之に乗り給え、今より自分の宿に同行して緩々と物語しようではないか」と云た。庵主は素より一文の車代の持合もなく、頭山氏も同様と見えて、帰路も又兩人でのそ／＼歩行すべく思うて居た矢先故、平岡氏の厚意は至極の幸と思うて、云わるゝ儘に其車に乗つて一同乗付けた所は、京橋区南鍋町の山城屋とか云う宿屋にて、(此宿は鹿児島の豪傑故野村忍助とて平岡氏が西南役以来の戦友の旧宿所たりし家である。後年庵主が此家屋敷を買入れて、門生共に三興社と云う輸入商店を開かせた家であつたのは実に一種の奇縁である)庵主も頭山氏も、平岡氏と共に車を乗捨て、二階に上り、三人火鉢を囲んで愉快に談話をして居る中、宿の下女が平岡氏の耳に近寄りて何事か唄くと、平岡氏は目を瞑らして、「下で払つておけ」と小声で云う、下女はしぶ／＼と下りて行く、又暫くすると其下女が来て、「帳場に小さいのが御座いませぬからどうか戴いて来いと申ます」と云うた時の、平岡氏のきまわり悪るそうな顔は譬えるに物なしである。庵主は之を聞くと同時に、「あ、此人も一文なしじやなあ、俺が払つて遣り度いが素より一文なしである。嗚呼車など飛ても無い物に乗つて來た」と後悔したが、頭山氏はと様子を見ると、是も一文なしの為めか笑を湛えて火箸で火鉢に字を書いて居る。平岡氏は同郷新顔の庵主に初対面の、

氣前を見せて車に乗せたのは好かつたが、車代を帳場が立替えぬで總ての不体裁を露出したのは、當時我々浪人仲間が、如何に惨澹たる貧乏海に遊泳して居たか分るのである。夫から平岡氏も余りのきまり悪さに、「僕は失敬じやが風を引いて頭が痛いから、寝ながらお咄を仕様」と云うて、直に西洋寝巻と着替え、側らに床を敷いて寝て咄始めたが、茲に又第二の毒箭は平岡氏の急所を射貫いた。夫は下女が座敷の隅の方に散在して居る蕎麦の井三四個を取片付けて持下げる序に、又平岡氏に向つて、「今、下に蕎麦屋が昨晚のお蕎麦の勘定を戴きに参つて居りますが如何致ましょう」と責め寄せたには、今迄堪えなくて来た平岡氏ももう耐え切れずに、思わず大声を発して、「五月蠅い、金の無い事は分つて居るでないか」と呶鳴り付け、其返す声で、「おい頭山、知らぬ顔せずに少将の事丈は早く金を搯えて来て片付けて呉れよ。風を引て寝て居ても寝かぬでないか」と叫んだ。此時迄庵主も頭山氏も可笑しさを耐えに耐えて居た我慢の堤防は、一時に決潰して只腹も破裂せん計りにドット哄笑した。此を見た平岡氏も余程可笑しかつたと見えて、ズーッと蒲団を頭から被ぶつて蒲団の中ではあーっと笑い出した。夫が又可笑しくて庵主も頭山氏も満身汗になり涙を流して笑い出し、挨拶も何もせぬ儘に日々笑いにこゝで二人でぞろ〳〵同道して帰つて來た。是が頭山、庵主、平岡三傑の初対面の記念で、一生涯忘るゝ事の出来ない事柄である。夫より平岡氏の綽名を庵主と頭山氏は少将と付けて、同氏の生涯中は平岡少将と呼なしたのである。此平岡氏が後に大炭坑の坑主として成功し、明治三十一年の大隈内閣の時には、数百万円の黄金を泥土の如くに擲却し、双手大勢の枢機を握つて内閣の興廢を企画した同名同一の平岡氏であろうとは、何人も予想する事は出来なかつたのである。嗚呼世運は梭の如く織成して、三十多年の年月を、花に紅葉に彩り、眺めに厭かぬ春秋も、移ると共に平岡氏は、岡ず一豎に冒れて、今は此世になき魂を、弔う野辺も松風の、音のみ戰ぐ淋しさに、只だ頭山氏と庵主のみ、仇事にして餉を、潰す浮世の戯れは、可笑しき事の極みである。斯くて物語れば世の中の、憂事知らぬ若冠は、今も昔も均しかる、青年血氣の世渡りは、後先知らぬ荒事と、只一向に思わんか、そは大いなる曲事にて、そもそも筑前と云う国は、文久元治の昔より、維新廢藩の其時まで、夙に薩長に先駆して、勤王大義の犠牲に、幾多の名士を失いしが、岡らぬ事より藩論の、蹉跌と共に後れを取り、遂に藩閥の族に乗り越され、

道路に倒れ牢獄や、鼎鑊に就きて憤死せし、先輩傑士の血を受けて、二の手となつて駆出せし、頭山、平岡両氏等の如き機涙の人々が、空手赤裸と艱難を、命の的と定めつゝ、君と国との犠牲に、傾け尽す心血の、其惨澹の有様は、貧と飢との其後は、奴隸となりて大江戸の、街に行吟う苦節こそ、寧ろ郷国一致の花として、今猶心に誇つて居るのである。これに引かえ一方藩閥の族は時を得て、日毎夜毎の宴遊に、太平樂の化粧会、鹿鳴館の楼上を、照らす火影の凄まじく、帝都の夜を睨むのであつた。庵主時に詩あり曰く、

鹿鳴館上宵如昼。
歌曲騒然翻舞袖。
幽囚月下作怨呪。

鹿鳴館上宵如昼。
歌曲騒然翻舞袖。
幽囚月下作怨呪。

3 庵主が大活躍の序幕

大池の蛟龍靈多く
辺陲良二千石を得て山川秀づ

庵主は此機会に於て頭山氏の事を少し書いて置こう。庵主は中年他県の人紹介せられ旅の空の東京で頭山氏に面会したが、氏は安政二年を以て福岡藩士筒井亀作氏を父として生れ、幼にして魁悟、群童を抜き、風貌皓鶴の如く、身心の素養只だ品位の高潔を以て健趾をなし、禅機満身に往来して、常に汚黓の外に解脱せり、長となるに及んで、早くも志を濟世救民の事に傾げ、其為す所、一も後生の師表たらざる事なく、実に山東の及时雨宋江明も斯くやと思わる、のである。庵主は艱難の中に長となり、天下の各階級に於て数限りなき清濁混淆の知人と交りしが、唯だ此頭山氏との交誼程神聖にして、且親密なりしものはないのである、随つて氏の性情を知る事も割合に深甚なるを自信するのである。

庵主の見を以てすれば、頭山氏の事は總て反対に解釈すれば大抵間違はない。氏は無学なようで學識があり、寡言なようでは能弁であり、卑近なようで深遠の理を究め、そつけないようで深切であり、恬淡なようで濃厚であり、忘れたようで強記であり、放漫なようで謹厳であり、冷酷なようで慈悲無量であり、無勘定なようで締括りがあり、物を容る、事志の深き事は、庵主の常に畏服する所である。故に庵主が前に後生の師表なりと絶叫するのは決して過獎ではないのである。氏も幼少より刻苦の中に長となり、或は田を耕して蔬菜を作り、或は薪を負うて市井に鬻ぎ、或は山林に入りて書を読み、或は江湖に放吟して隨所に眠る等、只管身心の鍛錬と世運の機要とを察して大いに為べきの時を待つて居たのである、白雲漠々たれども、多く高嶺に懸り、溪水滾々たれども、最も尽く大洋に入る、頭山氏の徳望は兎めずして四方に響洽し、天下有為の青年は期せずして其高風を慕い、桃李不言の門前は訪者の為め常に蹊を成すに至つたのである。家に儋石の貯なけれども、氣宇万方の富を圧し、身に韋帶（まだ仕官しない）を結べども、居常天下の大責に任ず、是に於て其門下に集斂する者は、熊能豹虎の士尽く天下に咆哮するの傑物である。頭山氏の一顰一笑は、實に此等百千豪傑の馳聘を制するの節旄（天子が使者に下の旗）である、庵主は白面空手の書生を以て此中に帰郷し釋なじみの青山江河と十数年振りに再会して、實に感慨無量であつた。先ず軒傾ける伏屋に呻吟せる老父母を省みて後、自分の今後に為すべきの事業を考えた。

- 第一、郷国割拠の風を打破する事。
- 第二、天下に氣脈を通ずる事。
- 第三、郷国独立の資源を開く事。
- 第四、地方的開発の事業を起す事。
- 第五、実社会の事物に接觸する事。
是丈けの事は庵主が頭山氏と共に為す事にして頭山氏が喜ばざる事なく、援助せざる事なく、即ち第一の問題には頭

山氏と共に今日迄蛇蝎の如く嫌惡せし地方官憲等と交歎を通じ、佐賀、久留米、熊本、鹿児島等の有志団体と連衡の道を開く事、第一の問題は人の交通と文書の往復とを以て常に脈絡を天下の士に失わざる事、第三の問題は福岡全県の地下に含有する石炭を政府が海軍予備炭と称して、其採掘を封鎖せるを随意民業に移さしむる事、第四の問題は道路及び九州鉄道の敷設、門司築港の事業を開始する事、第五の問題は總て天下社会的の問題を研究し、又其出来事には洩らず多少の興味と関係を持つて行動する事、此間殆んど十幾年、庵主海外に遊ぶ事前後四回、頭山氏の健康と威名は郷里の山川風物と共に長えに秀麗の色を湛えたのである。

茲に面白き一魔人とも云うべきは、安場保和と云う人である。此人は熊本の生れで當時元老院議官で前の目的の為めに芝兼房町の金虎館と云う宿屋にて面会し、福岡県に知たるべき事を勧めた処、安場氏曰く、明治の聖世に筑前の梁山泊に誘拐されて行つて溜るものか、真平御免だと云うから、庵主曰く、「明治の聖世に藩閥の豪傑の塵を払うと何れが好い、况んや筑前の梁山泊は宋江も晁蓋も放火殺人の悪戯を廃業して、宋朝の徳政に隨い仁者の民たらんとするの時機に於て、其地の県令として之を聖代の化に浴せしむるの良官たるを勧むるのに何が不足ですか、寧ろ閣下に大功の緒を授くるものではあるまいか」と云うたら、ウム、中々面白い、併し僕の身上は山田顕義氏に誓うた事があるから相談の上、返事すべしと云う。庵主曰く、藩閥の末輩山田顕義に一身の進退を托するような閣下では頗み少ない訳じやけれど、此方にも人物稀薄と云う弱身があるから仕方がない、山田氏の事は小生引受け快諾を得る事に仕ようと云うて別れ、夫より山田氏に面会して曰く、安場氏を此際福岡県の県令たらしむるは九州の統一を計る国家の善事だと思ます、又頭山や玄洋社の一統とも交驟的の結托がすでに出来て居りますから、今日安場氏を福岡に知事たらしむるは、政事の為、一大功績事業と云うたら、山田氏曰く、「ナニ、福岡の玄洋社や頭山等と安場が結托をしたと、俺は安場はそんな男とは思わなかつた、あんな非常識な豪賊見たような破壊的の者共と結托したとは沙汰の限りぢや、彼は正義堂々の士と信じて居たのに」と云うから庵主は占めたと思い曰く、「閣下は不見不知の頭山一類を目安として、夫と交らんとする安場の正義堂々を直に唾棄せんとせらるゝは何の事です、なぜ從来親交ある正義堂々の安場氏を目安とし

て、夫それが結托せんとする玄洋社や頭山氏等を信ずるの材料とはせぬのです、斯く云う小生も從来頭山氏等と少しの交誼もなかりしが、已に渾身の信用を以て頭山氏等の正義任俠の俊傑たるを認め国事を結托しました、其活動の初步として安場氏を勧誘した訳である、安場氏の頭山氏等を信用するのは頭山氏等の幸福に非ずして安場氏の幸福で、延ひては政府の幸福であります、又、小生等の幸福であります、閣下が安場氏を已に重信して或る事情の為めに俄かに之を輕棄するは、安場氏の不信に非ずして閣下の不明を暴露するものであります、小生は寧ろ閣下より安場氏に御勧誘を願うものであります、若し安場氏赴任の為めに多年の混乱を極めたる九州の政海に平穏の曙光でも見る如き事あらば、國家に対する閣下の御功績も亦尠なしとせずと思ひます」と云うたら成程夫なるほどされもそうだ、兎とも角安場に面会して咄はなして見みようと山田氏は答えた。庵主は直に安場氏に面会して山田氏に面会の顛末はなを咄はなすと、安場氏は目を丸くして、夫それは乱暴だ、自分は頭山等と結托した事はないないかと云うから、庵主は曰く、結托して居なかつたら是から結托したら良いではありますか、但し夫それが国家の為めに不善の事なら、已に結托して居ても何時いつでも破壊せられたがよい。善事と知つて何を躊躇するのです、一己この浅薄な事情の為めに善事と知つても逡巡せられるのなら、閣下は俱に語るに足らぬ人と絶叫して小生は引ひき下さがる迄の事じやと云うたので、いや實に九州の大事は此秋このときである、早速に面会の上、返事仕しようとの安場氏の約束を聞いて別れた。其後庵主が後藤伯に面会したら伯曰く、今日山田に面会したら「君きみが紹介したあの杉山と云う小僧は太い奴じや、好い加減な事を云うてとう／＼安場を福岡の県令に凌さわつていつたが、あれが福岡で甘味うまく行くか知らぬ」と云うから、僕は「安場位の犠牲は払はなうても福岡は混ぜ返して置くが國家の為めじや」と云うと、「うむ、夫それもそうじや」と山田が云うて居たぜと語られ、庵主は甘いなあと思うて居た処が、其月の末に安場氏は福岡の県令に任命せられた。是が庵主等これが福岡で活動を初める序幕であった。

4 大隈外相爆弾事件の嫌疑で

衝冠の壯士外相を狙撃し
一口の匕首自刎を遂ぐ

此新任福岡県令安場保和氏は、馬術の為めに足を折り片崎にならされたが、資性至孝にして清廉意氣磊落にして雅量に富み、勤王撫民の事に及んでは、日夜を顧みざる恪勤精励の士であつて、實に当世得易からざる良二千石であつた。此の人が学塾を陽明に置き修養を憲機に覗めたる頭山氏と、意氣投合したが為め、多年鬱積せる地方の弊竇は悉く以心伝心にて改善の緒に就き、国家的百般の美事善業は、画工が彩色を施すが如くに、見る／＼中に九州は別乾坤の如く立派になつて來たのである、先ず大幅道路の開鑿、九州鉄道、門司築港、鉱業鉄道、金辺鉄道、海軍封鎖炭山の開放等、今日九州の天地に磅礴する文明的大事業の基礎は、皆此時に創設せられたのである。庵主が弱冠にして此偉大なる両魔人に接觸したのは、實に生涯中に特筆すべき光榮である。是より間もなく發生した出来事は來島恒喜氏の爆弾事件である。此來島氏の父は、庵主の父と旧藩中同役の詔ある人にて通称を又左衛門と云い、至て温厚な士氣ある人物で、其次男が即ち恒喜氏である。此人も幼少の時は庵主の父の所へ読書などを習いに来て居た。廢藩の後、庵主も恒喜氏も相互に飄蓬流離東西に行吟い、前回にも述べた様に東京の頭山氏を芝口の宿で面会したは、互に八九歳の時以来十数年後の事であつたが、庵主が頭山氏と共に郷里に帰り、志業の為めに奔走するようになつてからは、常に来島氏も庵主の家にきたつて眠食して居た。或日恒喜氏は日当りの好き縁端に寝転んで、庵主に、「おい杉山、人間の自殺するのは咽管を刎ね切れば死ねるかのう」と云うから、庵主は、「馬鹿な事を云うな、咽管などを切つたら夫こそ見苦しい恥を搔くぞ、咽管に疾患のある時などは医者が刎ね切つて護謨管を継ぎ足して呼吸をさせ、其上の方を休ませて治療をするではない

か。武士の自殺する時は頸動脈が耳より後にあるから、耳尻に深く短刀を突込んで、斜めに気管に掛けて刎ね切り、短刀を握った儘両手を膝に突き、少し辛抱すれば脳の血液が直に下つて出るから、見苦しく居住居を崩さずに死ねるものじやと、俺は武芸の先生から聞いて居る。併し此等の先生も自分で死んで見てそんな事を云う訳でも有まいが、先ず斯道古来よりの経験上で云い伝えたのである。君は文学染みた慷慨家であるが、俺は無学で武的観念計りで暴れ廻ったから、幼少よりそんな事計り心掛けて居たからな」と云うたら、恒喜氏は、「うむそうか」と点頭して居た。「二三日過ぎて恒喜氏は「俺は一寸東京に行きたい」と云うから、庵主は彼が強烈な胃病持である上に、其頃大隈外務大臣の条約改正問題で、天下は蜂の如くに乱れ、人心は極度の激昂をして居る時であるから、短気の恒喜氏は行かぬ方が良いと思い、断然之を留めた。元来彼は寡言にして決断に富む男故、別に庵主に反抗もしなかつた。其後庵主は用事ありて対州、厳原へ三泊の積りで平丸と云う船に乗つて往き、帰つて来ると母が「恒喜さんが今夜の船で一寸東京に行くとて暇乞に来たよ」と云うから、庵主は何の暗示か異様の感じを起して、何だか心配で堪らず草臥を休める間もなく直に飛び出した時は、薄暮れの頃であつた。途中で林斧助と云う書林の店先を通つたら、店の内から斧助氏が（此人又知名の志士で市井坊間の商賈に身を潜めて居たのである）「おい／＼」と呼ぶので、其店に立寄つたら、斧助氏曰く「来島が今東京に立つて行つたが、此手紙を君に渡して呉れと置いて往たゞ」と云うて一封の手紙を差出した。庵主取つて之を読むと、「君が留めたけれど俺は用事があつて上京する、其事は着京の上通知する。旅費が入るので斧助氏の店から十八円借りて往く、君直に払つて置いてくれ、東京でも金が四五十円位は入るから電信打つたら送つてくれ」という意味が書いてあつた。庵主は其手紙を見ると直に駆け抜け、浜辺へ往つたら、已に端艇を一二町も海上に漕出した處であった。暮沈んだ春の夜の海面は鏡の如く静かに、舷灯と漁火と大空の星とは、互いに濡れた漆を述べるが如く薄鉛き光を流し合つた中に、薄墨の影法師のように二三の人の輪廓が見えて居る、浜辺へ駆付けた庵主は「おーい来島あー」と呼べば端艇から「おーい誰があー」と呼返し、庵主は「俺だアー杉山だー」と答えたら、来島氏は「一寸往てくるから跡を頼むぞー」と答えた。庵主は「夫はよいが身体を大事にしろよー」と云うと「大丈夫じやア

」と答えた。（その）其次是問屋の提灯の「ハ」の印の入ったのを高くさし上げて二ツ三ツ振つたが間もなく端艇も黒い波影にめり込んだようになつて見えなくなり、只ごとん／＼と、船を漕ぐ響きのみが微かに聞えた。これが庵主が來島氏と今生後生の生き別れ、永久再会の期なき火宅分離の交りを、休止するの時であつた。其後庵主は天下の形勢に鑑み、気掛りで、溜まらぬから左の意味の手紙を來島氏に送つた。

「君は短氣の為めに長策を誤つてはならぬ。大隈外務大臣の條約改正問題に対しては、天下何者か慷慨せざる者あらんや。併し斯かる問題の為めに満天下の人心を憤らしむるは、國家的觀念を向上せしむるに此上なき好機である。而して憤るべき憂世の問題は、決して此一事件のみでない。今当路娥冠彩冕の輩は、藩閥相周して党を廟堂の中に樹て、國家の大事を誤る事、挙げて數う可からず、故に此大隈外相の秕政を責むるを機会として、もつと志士の激昂を拡大せしめねばならぬ、左すれば大隈外相事件は、吾人が為さんと欲する事業の端緒である。昔時泰無道なるによりて沛公は志を得たり。大隈外相横暴なるによりて、天下の積弊を掃蕩するの機會を得べし、君庶幾くは誤る事勿れ」云々と云うてやつた。此手紙が未だ来島氏に到達せぬ中に、一発の爆裂弾はすどんと霞ヶ関の路上に響いた。庵主の手紙は郵便局で押収せられたそうなが、庵主は前後そんな事は知らず、丁度其日は江州の或る富豪と取引事件があつて、博多の水茶屋の常盤屋と云う料理屋で昼餐ちゆうさんを共にして居たら、どこ／＼と警部一人に巡查五人が其席上に闖入して来て、検事の令状を提示し、庵主をぐる／＼と捕縛して拘引した。其時其富豪先生の驚きと云うたら叫しにならぬ、丸で驟雨に遭うた山車の人形のように、瞬もせずに屁子垂れて居た。庵主も何が何やら更に分らぬが、ずん／＼拘引して往かれて留置監にぶち込まれたが、其夜の午前二時頃まで、監獄内は大混雜をして居る模様であつた、折柄庵主の脊中せきちゆうがちく／＼と痛い、何か虫でも蟻したかと思い、今まで凭り掛つて居た後の羽目板を獄窓の前にある硝子灯の投げた光にすかして能く見たら、藁のような物が継ぎ目から出てびん／＼動いて居る、是は隣房の誰か俺を突つくのだなど、能く注意して居ると何か小声に云うて居るようである。夫から其羽目板の割目に耳を押付けて聞くと「大隈は軽傷か重傷か」と云う。庵主はマダ訳が分らぬから、今度は庵主が口を割れ目に押付け「君は誰れじや」と問うと「俺は

皿茶碗屋じや、来島が」と云う声の聞えるか聞えぬ中にがちや／＼／＼と佩劍の音がして、看守が又一人罪人を連れて来て庵主の房内に入れ、「神妙にせねばいかぬぞ」と云うて出て行つた。庵主熟々と考へてはつと気が付いた。皿茶碗屋とは玉井騰一郎と云う人にて、此人は維新以来国事犯道楽にて、大村事件から前原一誠事件、西南事件や福岡、秋月、佐賀の騒動等、何時でも関係して居ぬ事のない、途轍もない魔人である。夫が隣房に収容せられて大隈云々來島云々と云う以上は、来島は何でも大隈外相を何とかしたに違いないと、やつと始めて悟つた。そこで庵主もどかんと腰が据り色々と冥想に耽りてうとくする中に夜も明けた。翌朝の九時頃、檻車で裁判所に送られ、更に謀殺未遂の嫌疑で拘引したとの言渡しを受けたから、来島氏は大隈外相を謀殺せんとはしたが、其事が未遂であつたと云う事が分つた。庵主を調べる検事は津田重照と云う人で眼光の炯々として見るから意地の悪るそうな、顎鬚の一面にある五十許りの人である。一番に一封の手紙を突付けて、此手紙に覚えがあるかと云う。夫は来島氏が林斧助氏に托して残し置いた手紙を庵主の家宅捜索をして押収した物である、其次に提示した手紙が、前に来島氏に送つた注意書である。「此手紙は其方の自筆であるか」と聞くから「そうだ」と答えると、さあ調が峻烈である、「双方で斯かる手紙を往復する以上は、今度の謀殺事件を根本的に知らぬ事はあるまい」と大石を屏風倒するように押掛つて来る。さあ茲で庵主が過つた。是は壯年血氣の者に得て有る失策である、此等は青年の者の心得て居らねばならぬ事故、斯くは面倒を忍んで書いて置く。庵主胃潰瘍の病後で頭がぐらぐらする処に、此顎末はまだく、長いから、此位にして後は次回とするが、庵主が此鬼検事と問答して居る時は、恒喜氏は已に三日以前に東京の霞ヶ関で、筑前信國の短刀を以て右の耳尻より左の耳尻まで突貫き、力に任せて前へ引いたから、丁度頸の三分の二は、動脈気管とも一度に切離して、前古未會有の最後を遂げ、庵主と曾て自殺問答の譏を実行して仕舞うた、庵主は未だそんな事は知らぬから、せつせと津田検事と論争して居たのであつた。

5庵主が受けた国事犯裁判

内相権を弄して選挙を妨げ
庵主薬泉に泊し公禍を蒙る

大隈伯謀殺未遂事件の嫌疑で庵主を調べる津田検事は、種々様々の論法を設けて、正犯来島と庵主が何等かの関係を以て、情を知つて帮助したものと見做して掛つて来る、甚しきに至つては、或る同志の者が已に今回の事件に付、来島と庵主が共謀なる事を白状して、今は遁る、道なし、若し明白に実状を告白すれば、情状を酌量して減刑の処置もあるかの如く威しつ賺しつ詰め寄せるのである。庵主年は若し、ぐつと癪に障つた為め、左の如き問答となつた。夫が裁判所と云う所に始めて出て、裁判官と云うものと始めて口を利き、従来悪い事も随分したが、縛られた事が始めてゞ、総て始めて尽してある所には、検事が嘘を吐いて庵主を威すから起つた失策である。

庵主「君は検事で候と云うて、言語動作共に傲慢無礼で、總て方角違ひの事を云うて人を威嚇するが、一体事實を虚構しても、人を罪に落せば夫て満足するのであるか、予は今嫌疑で捕縛された、即ち罪に対する所謂疑問の人であるぞ。夫に對して無礼の言語動作は何事であるぞ、予は一箇の紳士として、又國士として、君等の如き穢らわしき獄卒同様の者共に、侮辱を受ける筈がない。予に物を問うのなら、先ず君が言語動作から改めて、対人の敬意を表し玉え。然らずんば以後君が何を云うても、決して返答をせぬから左様心得よ」

と云い放つと、検事も余程癪に障つたと見えたが、其処が商売柄。

検事「其方は紳士と云うなら、知つても居るであろうが、此処を何と心得てる。此処は天皇に直属して、独立したる司法の大権を執行する裁判所であるぞ、其手続さえすれば、如何なる大官高位の人々でも、呼捨にして良い。